

インド発着コンテナ貨物の輸出入動向

掲載誌・掲載年月：日刊 CARGO 201508

日本海事センター企画研究部

(日本大学理工学部 助教)

客員研究員 川崎 智也

●はじめに

インド、バングラデシュなどの南アジア地域は、世界で最も経済成長が見込まれる地域の一つである。現在、南アジアの GDP は ASEAN と同程度であるものの、人口は ASEAN の約 2.5 倍である 17 億人であり、今後のさらなる経済成長が期待されている。特に、人口約 13 億人のインドは経済的ポテンシャルの高い国として認識されており、日系を含む世界中の企業による関心も高い。そのため、インドに拠点を構える企業は増加しており、それに伴ってコンテナ荷動き量も増加している。

しかしながら、インド発着コンテナ荷動き動向については資料が少なく、あまり知られていないのが現状である。そこで今回の記事では、IHS 社が提供する World Trade Service データを用いてインド発着のコンテナ荷動き動向（相手国別、品目別）について現状を簡単に整理していくこととしたい。

●インド積みコンテナ貨物の動向（輸出）

図表 1 に 05～14 年のインド積みコンテナ貨物の国別輸送量の推移を示す（上位 10 カ国＋日本）。まず、全体の傾向を見てみると、05 年のインド積みコンテナ貨物は 162.8 万 TEU を取り扱っていたのに対し、14 年には 307.3 万 TEU となり、10 年間で 144.4 万 TEU 増加している。また、この期間においては、09 年のリーマンショックを除いてコンテナ貨物輸送量が増加傾向にあることが見て取れる（09 年は米国向けコンテナ貨物の減少率が最も高い年であった）。年平均では、7.3%の成長率を記録しており、インド積みのコンテナ貨物は堅調に増加している。しかしながら、分析対象である過去 10 年間におけるインドの実質 GDP 成長率は平均 7.5%であることと、コンテナ輸送量の成長率は GDP 成長率を上回ることが多いことを鑑みると、インド積みのコンテナ荷動きの伸び率は必ずしも高いとはいえないと考えられる。

輸出先の国別にインド積みコンテナ貨物の動向を見ていく。図表 1 に示す通り、14 年は米国向け貨物が 62.1 万 TEU で全体の 20.2%を占め、最大のシェアを有していることが分かる。米国は 05 年から 14 年までインド最大のコンテナ貨物の輸出相手国であり、この期間に 23.3 万 TEU 増加している。しかし、05 年は 38.8 万 TEU でインドのコンテナ輸出相手国全体の 23.8%を占めていたことから（14 年は前述の通り 20.2%）、インド積みのコンテナ荷動き量としての米国のプレゼンスは、やや小さくなる傾向にあることがわかる。なお、米国向けで最多の品目は織物、革製品、アパレルである。

米国のプレゼンスをやや減少させている最大の要因となっているのは、インド積み第 2 位の中国向け貨物が増加してきた点にある。中国向けは 05 年が 11.3 万 TEU でインド積み全体の

6.9%にとどまっていたが、14年には30.3万TEUで同9.8%と堅調に増加している。中国向けコンテナ貨物としては、野菜関連品、綿がそれぞれ約10万TEU輸出されている。

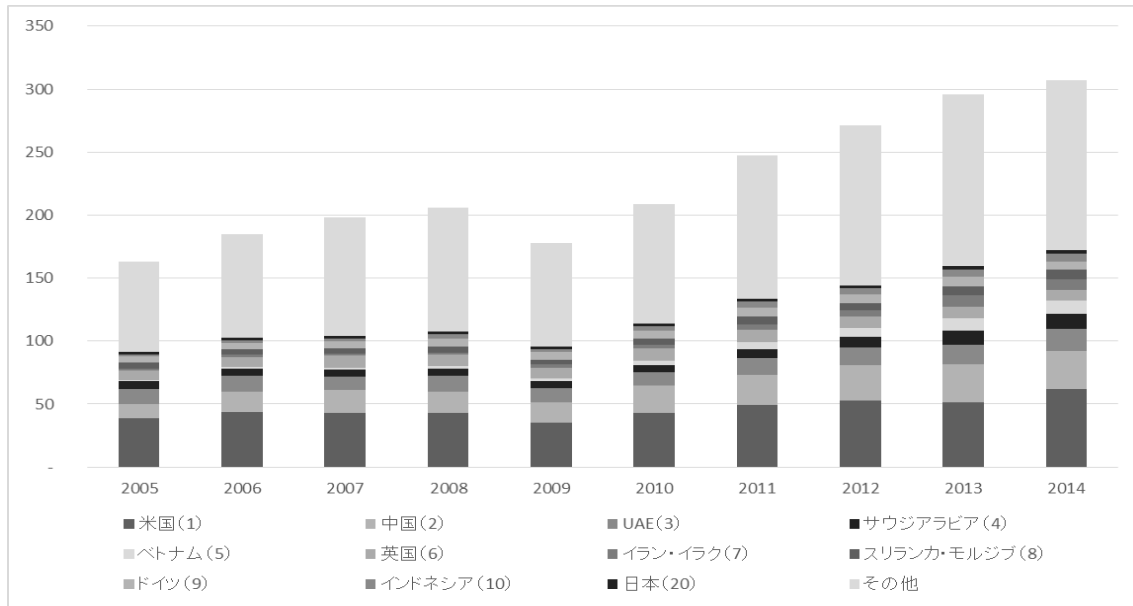
14年におけるインド発コンテナ貨物の輸出相手国の第3～10位は、アラブ首長国連邦(17.3万TEU、全体の5.6%)、サウジアラビア(11.9万TEU、同3.9%)、ベトナム(10.4万TEU、同3.4%)、英国(8.6万TEU、同2.8%)、イラン・イラク(8.6万TEU、同2.8%)、スリランカ・モルジブ(7.5万TEU、同2.4%)、ドイツ(6.7万TEU、同2.2%)、インドネシア(5.9万TEU、同1.9%)と続き、20位に日本(3.2万TEU、同1.0%)が登場する。ここで、「イラン・イラク」と「スリランカ・モルジブ」は今回利用したIHSのデータでは区別がつかないため、一つに集計して処理していることに注意されたい。

このうち、最も高い成長率であるのはベトナム向け貨物であり、05年には0.8万TEUであったが、14年には10.4万TEUにまで増加している。年平均の成長率は32.5%にのぼる。ベトナム向けで最も増加したのは牛肉系食品で、野菜系食品も比較的多い。インドは国民の8割がヒンドゥー教信者で、牛肉の殺生は禁じられているため、牛肉系食品の輸出が多いことは意外な結果であると思われる。もちろん牛の殺生は行われないが、水牛の殺生は宗教上問題がなく、インドは水牛を殺生して輸出しているのである。農畜産業振興機構によると、水牛を牛肉としてカウントした場合、13年の牛肉輸出量は168万トンであり、インドは世界第1位の「牛肉」輸出国なのである。

次に、イラン・イラクとインドネシアについて見てみる。05年と14年の両国向けコンテナ貨物量を比較すると、それぞれ年平均の成長率が22.2%、15.7%となり、インド積みコンテナ貨物の輸出相手国としてベトナムに次いで高い水準となっている。イラン・イラク向けでは、米の輸出が152TEU(05年)から4.3万TEU(14年)と大幅に増加していることが過去10年の大幅なコンテナ荷動きの伸びに寄与している。インドネシア向けでは野菜系製品が大幅に伸びており、全体の荷動き量の増加につながっている。

日本向けについては、インド積みコンテナ貨物の中において、プレゼンスは比較的小さい。輸送品目としては、動物系製品(革製品など)と海鮮系食品がそれぞれ約7千TEUと比較的多くなっている。

図表1 インド積みコンテナ貨物の国別輸送量の推移



●インド揚げコンテナ貨物の動向（輸入）

図表2に05～14年のインド揚げ（輸入）コンテナ貨物の国別輸送量の推移を示す（上位10カ国＋日本）。05年のインド揚げコンテナ貨物は86.3万TEUであったのに対し、14年には225.3万TEUとなり、過去10年で139.0万TEU増加していることが分かる。年平均の成長率は11.3%であった。ただし、図表2で示される通り、12年以降はやや減少もしくは横ばいの傾向にあり、コンテナ輸送量が頭打ちである状態が続いている。コンテナ貨物量が増加傾向にある05年から11年に絞って見てみると、年平均の成長率は16.9%と堅調に伸びていた。

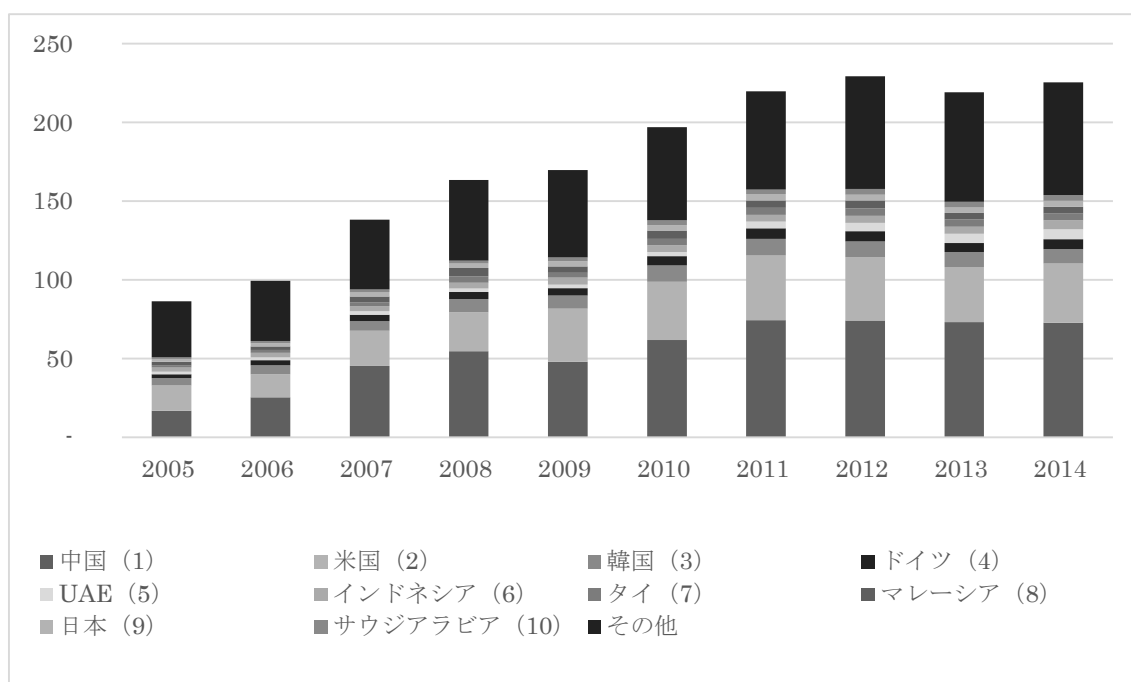
次に、輸入相手国別にインド揚げコンテナ貨物の動向を見ていく。輸入の場合は、前述した輸出の場合とは反対に、中国積みが72.8万TEUで全体の32.3%を占め、米国を上回り第1位となっている。中国積みは、04年にインド向けコンテナ貨物の輸出を大きく増加させており、同年に米国積みのコンテナ貨物輸送量を上回った。その後、現在に至るまでインド向けコンテナ貨物のシェア第1位をキープしている。中国積みコンテナ貨物については、06～07年の間に約20万TEU荷動き量が増加している。特に増加している品目は化学関連品であり、1年間で約4万TEUの増加を記録した。中国積みは11年の123.7万TEUをピークにその後は緩やかに（ほぼ横ばいであるが）減少している。インド全体のコンテナ貨物の輸入量が最近3年増加していないのは、中国積みコンテナ荷動き量がやや頭打ちの状態となっていることが大きな理由となっている。

米国積みについては、05年から14年の間でインド揚げコンテナ貨物のプレゼンスが減少傾向にある。05年が16.1万TEUで全体の18.7%であったが、14年には37.6万TEUとなり、コンテナ貨物量としては増加しているものの、シェアは16.7%と、約2%減少している。これはインド積み（輸出）の場合と同様の傾向である。米国積みの品目では、木材・紙などの関連製品の荷動きが17.6万TEUと、多品目と比較して圧倒的に多い。そのうち、古紙が7.8万TEUと約40%を占めている。インドは米国などから古紙を輸入し、それを堅紙などに加工している。

14 年におけるインド揚げコンテナ貨物の第 3～10 位は、韓国（9.0 万 TEU、全体の 4.0%）、ドイツ（6.4 万 TEU、同 2.8%）、アラブ首長国連邦（6.3 万 TEU、同 2.8%）、インドネシア（5.6 万 TEU、同 2.5%）、タイ（4.4 万 TEU、同 1.9%）、マレーシア（4.3 万 TEU、同 1.9%）、日本（3.8 万 TEU、同 1.7%）、サウジアラビア（3.7 万 TEU、同 1.6%）と続いている。以上より分かるのは、インドの輸入は、輸出と比較して米国と中国への依存度が高いことである。なお、米国と中国への依存度が高いことは、比較的多くの国において見られる傾向である。

インドのコンテナ貨物の輸入相手国として、中国に次いで最も高い成長率を示しているのがアラブ首長国連邦であり、1.6 万 TEU（05 年）から 6.3 万 TEU（14 年）まで増加しており、年平均成長率は 16.1%にのぼっている。アラブ首長国連邦積みで最も増加した品目は石材・粘土などの鉱物である。また、タイからの輸入においても、05 年と 14 年を比較すると、年平均 13.8%の高い成長率を記録している。タイ積みの品目では、化学関連品と自動車関連品が比較的多いが、11 年以降はそれらの品目は横ばいもしくはやや減少傾向にある。日本積みは、インド揚げコンテナ貨物の 1.7%を占めるに留まっており、インド積みと同様プレゼンスは大きくない。インドが日本から輸入している品目としては、自動車関連品と電子機器類が約 1 万 TEU と比較的多い状況となっている。

図表 2 インド着コンテナ輸送の国別輸送量（2005～2014、TEU）



●おわりに

今回の記事では、インド発着のコンテナ貨物の概要を述べた。インドは人口が約 13 億人と極めて大きな市場であり、高い経済成長率を誇っている開発途上国である。そのため、インドのコンテナ荷動きは今後も増加を続けていくものと考えられるため、今後もインド発着のコンテナ荷動き動向を注視していく必要があると考えられる。